

山口夏子の回想

今日 あした

川沿いにある山口夏子の家のドウダンツツジの垣根は、いつもきちんと四角に刈り揃えてある。今が紅葉の真っ盛り。朱色のベルベットのような深みのある小さな葉が陽に照り映えて、息をのむ程美しい。この家を建てて以来七十余年、年に二回植木屋を入れ、手入れを欠かしたことがない。

九十九歳になった夏子は縁側の籐椅子に座り日向ぼっこをしながらぼんやりと朱く染まったドウダンツツジに目を遣り、また今年も生きていると思った。若い頃は体が弱かったのに、子供を産んでから体質が変わったのか病気がらしい病気がしたことが無い。十五歳年上だった夫の忠雄は早めに旅立ち、一人息子も別に暮らしているので気楽な一人暮らしである。

だからと言って夫や息子に不足があつたわけではない。会計事務所を経営していた忠雄とは見合い結婚だが、彼は初めて夏子を見た時、ポツティチェリーのヴィーナスの誕生の絵の貝に乗った女性にそっくりだと思ったそうだ。一目で気に入ったが、年の差を考えて諦めていたのに嫁に来てくれた、と言ってとても大事にしてくれた。息子の稔も大人しく、取り立てて心配する事も無かった。

夏子は元来活動的な人間ではない。人付き合いも面倒だと思う。読書が好きで、とりわけ推理小説を読みだすと時間を忘れる。そんなに好きな本も読むのが億劫になって来た。たった一人分でも、家事をするのに時間がかかる。

そんな弱音を言ったこともないのに、千葉に住んでいる稔は、介護制度を利用するようにと言う。何も他人の世話にならなくても自分のことくらい自分で出来るのに……。

つまらないことを考えていたら、ぞくつと寒気がした。秋の日差しはあつという間に陰ってしまう。

ドウダンツツジの垣根は葉を落として細い幹と枝だけになると、見通しが良くなり垣根の役を為さなくなる。以前は目隠しになる木が沢山植えてあったのだが、手入れが大変なので庭の真ん中に桜の木を一本遺してあとは始末をってしまった。

ここ一週間、南側の道路から垣根越しに見える山口家の雨戸は一枚しか開かない。夏子は、ぞくつと寒気がして以来体調がすぐれない。それでも頑張っていていたのだが、ドウダンの葉がすっかり落ちてしまったのを見て横着を決

め込んだのだ。

一階の十畳の客間にじゅうたんを敷いて寝室にしているのだが、ほとんどの時間をベッドの中で過ごしている。お腹が空いたらたくさん買い置いてあるレトルト食品を温めて食べればいいのだが、空腹を感じない。

うとうととしていたら、ずっと昔、この家に住み始めた頃のことを思い出した。

春になるとドウダンツツジの垣根は新緑の柔らかい小さな葉をつける。しばらくするとその葉っぱの隙間に、スズランを小さくしたような鈴形の白い花がたわわに咲く。そんな季節だった。

その頃、水騒動と言うのがあった。

この一郭はもともと天文教の持ち物でそれを分譲したため、道路は天文教の私道になっている。その私道の一方は公道に、もう一方は、川沿いの遊歩道に繋がっている。

夏子の家は私道の突き当りと、川沿いの遊歩道との角地にあった。

私道の地下に水道が通っているのだが、その水源は公道側だけなのだ。公道に面した片側に天文教があり、夏子の家との間に五軒の家がある。向かい側にも八軒が並んでいる。計十五軒が片側から流れてくる一本の水道管を使っている。その為、朝晩水を一齐に使うと、末端の山口家は水の出が悪くなる。

住み始めてしばらくしてこのことに気がついた。まだ水洗トイレではなかったので、夫には洗面用の水をやかんに入れて用意したこともあり、不便は感じないようだったが、夏子はちよろちよろとしか出ない水に苛立った。区の水道課に電話をすると

「本管からもう一本水道管を引けばいいのですが、そちらは私道ですから個人の負担になります。私道を公道にして貰えば問題は解決するのですがね」と言われた。夏子は天文教の奥さんの喜美子さんに水道課で言われたことを話してお願ひしてみようと思つて、夫と一緒に何度か行ったことがある天文教の道場に早速行つてみた。

公道に面した所に広場がありその奥に『天文教・杉並道場』と墨で書かれた木の看板が架かった平屋の建物で、看板の下にガラス障子の引き戸がある。

「ごめんください」

ひと気が感じられなかったが、戸に向かって言つたら、

「はい」

とぶつきらぼうな声がして硝子戸が開き、まだ若い青年が出て来た。信者の

人かと思つて

「天文教の奥さまはいらっしゃいますか」と言うのと

「母は、家にいるので、家の方に行つて下さい」

「何処から行くのですか」

「じゃあ、僕が案内します」

天文教の息子だった。彼は一旦道路に出て、私道側にある私邸に案内してくれた。喜美子さんは、「長男の隆志です」と改めて紹介して、大学生だが今は春休みなので修業をしていると言つていた。

喜美子さんに水の話をする時、しばらくなにか考えている様子だったが、

「皆で使う水のことなので、集まってもらつて、相談することになりました」

と言われ、後から日時を連絡してくれることになった。

その日になった。

通りを挟んだ家の奥さん達が、天文教の道場の畳の部屋で輪になって座つた。

夏子は新婚で越してきたばかりだが、みんな普段からお付き合いがあるのかかヤガヤと姦かしましい。

喜美子さんがまだ来ていない時に近所の人に

「お水が全くでないことがあるのですか」と聞かれた。

「いいえ、そんなことはありませんが、朝晩はちよろちよろとしか出なくつて

……」

「お困りでしょう」

「ええ」

「本管からお引きになるのですか」

「区の水道課に聞いてみたのですが、距離が長いので随分お金がかかるそうです。私道を公道にしたら、都の方で工事をして下さるそうなのですが……」夏子が小さな声で答えた。

方々で、呆れたように「ひそひそ」言い始めた。まずいことを言ってしまったのかしら、どうしようと思つたら、

喜美子さんが入つて来てみんなにお茶を配りながら

「他のお宅はどうなのかしら、水が出なくて困っている方はいますか」一同を見回して言った。

「うちは別に……」

「うちも気になりませんわ」

「うちの主人なんか、髭剃りに時間がかかつて洗面所を占領しているのだけど、

台所の水が出にくくなる、なんてこともないわね」

「うちは、娘がいつまでも占領して困っているわ」などと、関係ないことまで次々に話し出す。いつまで続くのだろうと思っていたら、

「喜美子さんはどうお考えなのかしら」

井上さんが言った。井上さんは、私道の中程の家の人だ。

「そうねえ、お水が出ないんじゃないや困ってしまいうわねえ……、他の家は水が出るのよねえ……私道とはいってもずっと昔から天文教の土地だしねえ。」

喜美子さんは煮え切らない。すると他の人が、

「私道は、天文教さんのご厚意で使わせて頂いているのですから、喜美子さんがそのままのほうがいいのでしたら、私達がとやかく言うことではないと思いますよ」そして口々に「そんなの当たり前ね」「そうですわ」と、言い合っている。なんだ、最初から筋書きが出来ていたのじゃない。夏子はムツとして黙り込んだ。

その時だった。道場の隅にいた大学生の隆志君が、話し合いの輪に入ってきて

「山口さんが困っているんだから、もつと真剣に考えるべきだよ」

「だって、天文教の土地なのよ」喜美子さんが感情的に言った。

「聞いていたら、私道から公道にすれば解決するのだろう」

「そう簡単な問題ではないわよ。隆志が口を出すことじゃないわ」

「もういいです。わかりました」と夏子。

「良くないよ。母さん、そう言えば、アキラの家も水の出が悪いつて言っていただろう」

「アキラ君って、水谷さんの？ 水谷さんのお宅も川沿いだったわね……」

水谷さんは、夏子の家の隣で、やはり一本向こうの私道に面している。

「アキラの家と山口さんの水道管をつないだら流れが出来るから水の出も良くなるのじゃないかな」

隆志君が積極的に動いてくれて、話はスムーズに進み末端の二軒の水道管は繋がり、工事費も二軒で負担したので安上がりで済んだ。

夏子は、仕上がりを見に来ていた隆志君を見かけてお礼にお茶でも飲んで行かないかと軽い気持ちで誘ったら、とても嬉しそうに「はい」と言って入って来た。客間に案内して床の間を背にして座ってもらった。夏子はお茶の用意をして中廊下の方から入ってそのまま座り、お盆を畳の上に置いて、

「色々お世話になりました。こんなものしかなくてごめんなさいね。どうぞ召しあがって」と言いながら隆志君の前にお茶と羊羹を並べた。自分の所にはお茶だけ置いて斜め横の位置にいる隆志君の方を向いて

「もう学校は始まったのかしら」と聞いた。

「いえ、まだです。四年生なので……」

「そう……」

普段から夏子は自分の方から話すタイプではない。すぐに話に詰ってしまった。隆志君は羊羹には手を付けず、もじもじしている。

「甘いものは、お嫌い？」夏子が隆志君を覗き込むように見ながら聞いた。

彼は、思いつめたように

「好きです」と言って夏子の手を取って膝をずらし、夏子にかぶさって来た。

咄嗟のことで、夏子は反射的に筋肉質の隆志君の堅い体を包み込むように自分の胸で受け止めてしまった。

困った。躲すかわすタイミングを逸した上に、そのまま畳の上に倒れ込んだ。そして夏子は自分と大して年の変わらない青年のがむしゃらな行動に抵抗もせず、共に深みに落ちていった。

いつまでも未練げにぐずぐずしている隆志君をおいて服をまとめて部屋を出た。ゆっくり身支度を整えて、熱いお茶を入れて部屋に戻ると、彼は服を着ているところだった。熱を帯びた目で夏子を見て近付いて来た。

「お茶をどうぞ」無表情で言うと、しぶしぶ服を着て元の位置に座って、照れたように笑った。

「今日のことは警察に届けないから、二度とこんなことはしないでね。お母様にもお友達にも誰にもいっては駄目よ」無表情を崩さずに言った。

ふふっ、夏子はベッドの中でかすかに笑った。あの時の隆志君は可愛かったなあ。私の胸に顔をうずめて、柔らかいなあ、あったかいなあ……。警察、と言った時の、怯えたような、悲しそうな顔。「はい」と言って帰って行った後ろ姿。たった一度の小説のような出来事を、これまでに何度思い出しただろう。

夏子は幸せな気持ちで深い眠りについた。

翌日、千葉に住んでいる稔の家に警備会社から電話があった。

「二十四時間動きがないので、電話をしてみたのですが応答がないのでお知らせ

せします」

独り暮らしの夏子の為に、警備会社の見守りサービスを頼んでいたのだ。夏子の場合、一人でトイレに行くことが出来るので、ベッドの横に特殊な敷物を置いて、そこを通過するのを見守っていたのだ。

「おふくろが動いていないっていうから、行つて来る」と妻に言う

「私は友達と音楽会に行くから、一人で行つてね」と言っていた。

小さい頃、稔は「お前の母ちゃんは美人だな」と言われるのが嬉しかった。自慢の母だった。感情を表に出すことはほとんどなく、いつも綺麗だった。だが妻には「あなたのお母様程自分勝手な人はいないわね」と言われた。

ずっと一人で暮らしていて、不平も言わないが、楽しそうにも見えない。

冬枯れのドウダンツツジは葉を落としてレースのように家の周りを飾っている。

稔がカギを開けて家の中に入り、昔は客間だった夏子の部屋に入った。もう息を引き取っていたが、年を取っても昔の面影を残した夏子の顔はうっすらと微笑んで見えた。自分らしく生きて満足しているように見えた。

了